

# 私の夢芝居

稲森 俊英（3組）



平成二十六年一月五日、午前七時三十分。天気晴朗なれど、昨夜来の寒気が厳しい朝である。防寒コート、防寒帽、耳当て、マフラー、毛糸の手袋と完全装備で身を固め、日課の早朝ウォーキングに出掛ける。

散策路はいつもの山崎川沿いコースであるが、今冬の寒波襲来と正月気分も抜けやらぬ早朝のためか、いつもに較べ人影は疎らである。耳当ての中で響くウォークマンの音色は今日も心地よい。車両乗入れ禁止の散策路は静謐と安全が確保され、夢芝居に想いを馳せるには絶好の夢舞台である。

さあ、今朝もサム・テイラーが奏でるテナーサクソの音色に誘われ、夢芝居の幕が開く。曲目が『別れのブルース』に変わったようだ。

## ◆夢芝居Ⅰ◆

窓を開ければ港が見える

♪メリケン波止場の灯が見える

想いは一気に五十年の時空を遡る。

大学一年秋の前期試験前夜、麻雀に明け暮れ、落ちこぼれた連中が我が下宿に集い、一夜漬けの勉強会を開き、最後の悪あがきをしていた。三時間ぐらいは夫々に頑張っていたが、所詮は無駄な抵抗であることを悟り、勉強会断念！

一同打ち揃って、徒歩十分程のヌード劇場に繰り出し、夜間割引興業を見物。日頃の怠慢への悔恨やら、追試受験の憂鬱さなど、様々な思いが行き交う中、眼だけはスポットライトに浮かぶ踊り子を追い、物哀しいサクソの響きに、ひたすら聴き入っていた我が姿へとタイムスリップする。

苦くも切ない我が青春の「コマである。まさにこの時『別れのブルース』とこの情景とがシンクロし、脳裏に刷り込まれた。

（後日談…その後の伊勢湾台風襲来により前期試験は実施中断。実施済みの試験は



すべて御破算となった。神風が吹いた！

曲目がまた変わったようだ。

## ◆夢芝居Ⅱ◆

誰にも言われずたがいに誓った

♪かりそめの恋なら

ムード溢れた松尾和子姐さんの歌声が蘇える。

教養課程の頃、級友二人と離れ家一軒を借り、半年ほど共同生活をしてきた時期の話である。月末の三日程は決まって金欠病となり、互いの財布の中身を確認し、どちらかの仕送りが届くまで、いかに食い凌ぐかという我慢の生活であった。

銭湯帰りの道すがら、耳にした歌を二人して口ずさみ、惣菜屋で夕食のおかずとして魚フライを残り金と相談しながら買い求めた。

その時の歌が『誰よりも君を愛す』であったが、松尾和子のハスキーな声に魅かれていたこともあるが、楽曲の曲想が我が心境にぴったりであった。

この時『誰よりも君を愛す』と「級友との共同生活時代」がシンクロした。その級友は、日清食品社長時代に損なった健康回復のため、郷里信州に引き籠ったと聞いていたが、それも順調に回復しつつあることが年賀状に書き添えてあった。御同慶の至りである。

## ◆夢芝居Ⅲ◆

やると思えば どこまでやるさ

♪それが男の 魂じゃないか

優しかった兄の愛唱歌である

『人生劇場』「雪の渡り鳥」は、若い頃からの兄の十八番であるが、西郷さんまがいの大きな身体で絶唱されると迫力があり、本人がなりきっているだけに心に響いた。

昭和二十一年、夏の満州引き上げ行では、衰弱しきった私の手を引き、リュックの肩代わりもしてくれた弟想いの兄であった。その兄も今は亡い。





平成十五年一月、グループ会社の幹部懇親晩餐会の最中、秘書課員に耳打ちされた。「お宅からお電話です。」  
 女房から兄急逝の知らせを受け、急ぎよ帰宅し、奈良の兄貴宅へ車を飛ばした。告別式場のBGMには『人生劇場』『雪の渡り鳥』が繰り返し流れていた。義姉のはからいであろう。



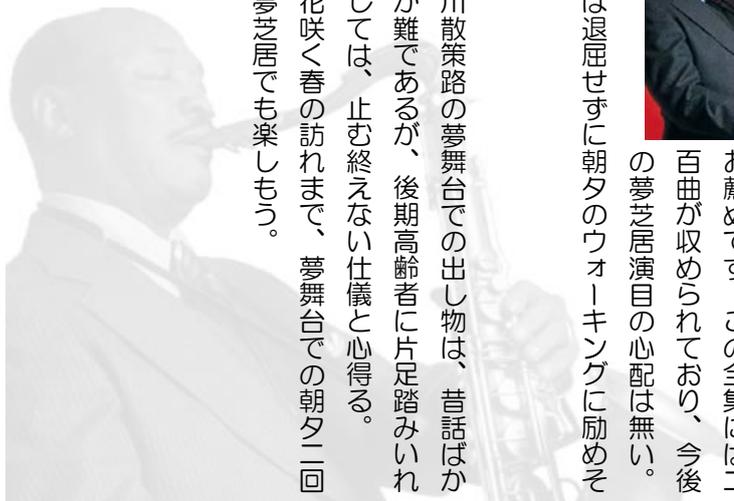
以上、私の夢舞台の様子を紹介したが「歌は世につれ、世は歌につれ」を地で行っているのが「私の夢芝居演目」です。  
 昨夏、『テナー・サクソで綴る「昭和歌謡大全集」』(演奏：サム・テイラー)を購入しました。テナー・サクソ独特の腹底に響く低音にしびれ、歌詞に邪魔されることなく自分の世界に埋没している。

サム・テイラーの演奏の素晴らしさもあるが、歌謡曲をサクソ演奏で聴くと歌手の歌声とは異なった趣の楽曲に思える。お薦めです。この全集には二百曲が収められており、今後の夢芝居演目の心配は無い。

当分は退屈せずに朝夕のウォーキングに励めようです。

山崎川散策路の夢舞台での出し物は、昔話ばかりなのが難であるが、後期高齢者に片足踏みいれた身としては、止む終えない仕儀と心得る。

桜の花咲く春の訪れまで、夢舞台での朝夕二回公演の夢芝居でも楽しもう。



## 八期通信アーカイブス

2007年 第13号  
南郷 善之助(2組)



八期会世代にとって、映画のそれぞれのシーンが懐かしさの玉手箱だった。

あの頃、有楽町の日劇で始まった「ウェスタンカーニバル」は、新しい時代の幕開けでもあった。ロカビリー三人男が、映画や音楽の世界で大活躍して三人ブームの先駆となったのもこの頃だった。新宿や渋谷の歌声喫茶やジャズ喫茶も連日満員の盛況で、ラジオからはポールアンカの「ダイアナ」や「クレイシラブ」などが流行していた。それからインスタントラーメンの「チキンラーメン」が初めて売り出され、安くて手軽なために、一躍人気商品になったのもこの頃だった。

僕は、今のNHKがある代々木公園が、まだアメリカ軍のキャンプ地だった頃にそこでアルバイトをしながら大学に通っていた。

仕事は「デリバリーサービス」とカタカナで書くと格好が良いが、早い話が将校夫人達が基地内のP×「スーパー」で買った品物をハウスまで届ける運び屋である。

その頃、日本ではまず手に入らない珍しいタバコ「キャメル」や「ラーク」洋酒をチップとして貰い、下宿仲間や友人に分けてやり、大変喜ばれた。その時一緒にいた下宿仲間の一人が、五組の松元英雄君だった。

当時、日活映画のオーディションに見事合格したのですが、これから俳優の卵という時に惜しくも体を壊した。あの時、元気で頑張っていたら、草野大悟と二人の映画スターが、我が八期会から誕生していたかと思うと残念でならない。

## 八期通信アーカイブス

2005年 第11号  
泊 更子(4組)



さて、今年は戦後60年、被爆60年とあって、新聞もテレビもラジオも特集が組まれていて、思い出すこと、考えこんだり、これからのことなど心配したりしている。

敗戦の年は、5歳。同窓、同級生なのだからほとんどの人が5歳か6歳だったわけだが。

両親は、同輩と相談してボンボン船をチャーターして、何家族か一緒に朝鮮北部から引き揚げてきた。魚雷が浮いて危険だという西之表港に立寄り、やっと屋久島の安房港に着いた。

そこからの60年になる。母は、翌年(1946年)30歳で病歿。父は、1978年、69歳で病歿。勿論、両方の祖父父母、両親の兄弟姉妹達も今は亡い。

高校卒業後、大学病院附属の看護学校に進み、40年間看護婦として働いた。結婚せず、自分の家族を持たなかったので、仕事一筋で生きてきたのである。

定年60歳の1年は苦しんだ。否応なしに毎日毎日、自分と向き合わざるを得なかったから。これは苦しいものです。あの時、ああすればよかった、こうすればよかったと、過去のさまざまを悔いる。

高校の3年間は、何と云えばいいのでしょうか。それまで、裸足でとびまわり、起きて寝て、いつも着たきりの生活から出てきて、何とも美しい、まばゆい少年少女たちに圧倒されて、地道に真剣に、自分の人生を考えることをしなかった。

3年生の時の「分水嶺」というクラス誌、授業の休憩時間に校舎の階段で「原爆ゆるすまじ」をうたっていたことなど、そういう人たちがいたことなども思い出します。